

1996年11月5日(火) - 1997年2月1日(土)

東京国立近代美術館フィルムセンター(京橋)

主催◎東京国立近代美術館フィルムセンター、国際交流基金、朝日新聞社

後援◎フランス外務省、フランス大使館、映画生誕百年祭実行委員会 協力◎日本航空

料金: 前売り1回券/一般1,800円、大・高生1,300円、中・小生1,000円

5回券/一般7,000円、大・高生5,000円、中・小生4,000円

10回券/一般12,000円、大・高生9,000円、中・小生7,000円

当日券(1回券のみ)/一般1,800円、大・高生1,500円、中・小生1,200円

前売り券は都内プレイガイド、大学生協、チケットぴあ(03-5237-9999)、

チケット・セゾン(03-3250-9999)にて10月1日より発売開始。

●発券は上映の1時間前から行い、定員に達し次第締め切ります。

●前売り券(5回券、10回券を含む)に日時指定はありません。

各回、当日券と同じ列に並んでいただきます。

満員の場合は入場できませんのであらかじめご了承ください。

●ホールは上映30分前に開場します。

●開映後の入場はできません。

お問い合わせ:

朝日新聞社東京企画部(03-5540-7450)

国際交流基金視聴覚課(03-5562-3535)



●フィルムセンター 東京都中央区京橋3-7-6

NTTハローダイヤル: 03-3272-8600

写真は『獣人』(1938) ジャン・ギャバンとシモーヌ・シモン

初期のサイレント作品から、名作『どん底』、『大いなる幻影』、

『ゲームの規則』、『フレンチ・カンカン』まで、巨匠ジャン・ルノワールの全作品を本邦初上映!

ジャン・ギャバン、イングリッド・バーグマン、フランソワーズ・アルヌール、ミシェル・シモン、

アンナ・マニャーニなど往年の名優たちの饗宴

ジャン・ルノワール、

Le Grand Théâtre de Jean Renoir

映画のすべて。



「水の娘」*La Fille de l'Eau*

(1924年、70分、白黒、サイレント)

記念すべきデビュー作。動く船の上で炊事をする少女をとらえた最初のシーンに、ルノワールのすべてが込められている。少女を演じるのは、妻カトリーヌ・ヘスリング。今回のために新たに焼いた、ニュープリントによる上映。



「のらくら兵」*Tire-au-Flanc*

(1928年、130分、白黒、サイレント)

ルノワールが初めて撮った、男性を主人公にした作品。選ばれたのは、ミシェル・シモン。彼は、突飛な行動を繰り返す兵隊を見事に演じ、ルノワールの最も愉快な作品となった。ルノワールが敬愛したチャップリンの影響も濃厚。



「牝犬」*La Chienne*

(1931年、100分、白黒)

この作品から、ルノワールの第1期黄金時代が始まる。ジゴロ役のジョルジュ・フラマンと、その情婦ジャニー・マレーズに日曜画家のミシェル・シモンがからむ愛憎劇。あまりのリアルさに俳優たちか映画と同じ恋愛関係になったという。



「ボヴァリー夫人」*Madame Bovary*

(1933年、105分、白黒)

フロベールの原作を忠実に映画化した。主人公のエマを演じるのは、当時四十歳の舞台女優ヴァランティーン・テシエ。ダリウス・ミヨーのオリジナル音楽も興味深い。今は失われた当初の30分間はさらにすばらしいという。



「女優ナナ」*Nana*

(1926年、145分、白黒、サイレント)

シュトロハイムの『愚なる妻』を見たルノワールが、リアリズムをめざして作った作品である。ゾラの小説が原作だが、ほとんどドイツで撮影された。ナナの愛人ミュファ伯爵を演じるのは『カリガリ博士』で主役のヴェルナー・クラウス。



「騎馬試合」*Le Tournoi*

(1928年、120分、白黒、サイレント)

ルノワールが初めて挑んだ歴史劇。16世紀、宗教戦争の時代を舞台に決闘が繰り広げられる。南仏カルカソンスに壮大なセットを組み立て、数千人のエキストラを使ってコスチューム・プレイが繰り広げられる異色作。



「十字路の夜」*La Nuit du Carrefour*

(1932年、74分、白黒)

シムノンの小説を原作にした、謎のダイヤモンド高級殺人事件を追うメグレ警部の物語。複雑なプロットのうえに同時録音でセリフも聞き取りにくい。ゴダールはこの映画をフランスで唯一のフィルム・ノワールだと述べている。



「トニ」*Toni*

(1934年、96分、白黒)

南仏の労働者の暗鬱たる物語を、多くの素人を起用し、セットを使わずに実景で撮影したこの作品は、イタリアのネオ・リアリズムの先駆と言われている。マルセル・パニョルが製作を助けたほか、27歳のルキノ・ヴィスコンティが見習いとして参加。



「チャールストン」*Charleston*

(1926年、21分、白黒、サイレント)

氷河に襲われて崩壊したヨーロッパ。人工衛星に乗った黒人の学者が怖い「野蛮人」から、チャールストン・ダンスの手ほどきを受ける。カトリーヌ・ヘスリングが喉を振って、情熱的な踊りを見せる。



「荒地」*Le Bled*

(1929年、85分、白黒、サイレント)

田舎領アルジェリアを舞台に、植民地主義の国策映画として作られた幻の作品。青年が愛する女を救うために馬で追いかけるラスト・シーンは、西部劇そのものである。シネマテーク・フランセーズ門外不出のプリントを今回に限り上映。



「素晴しき放浪者」*Boudu Sauv  des Eaux*

(1932年、83分、白黒)

ルノワールのおおらかで自由な思想を体現する名優、ミシェル・シモンが繰り広げる楽しい物語。セーヌ河に身投げした浮浪者ブーデュは、助けられたうえ、小間使の娘と結婚させられるが…。原題は「水から救われたブーデュ」。



「ランジュ氏の犯罪」*Le Crime de Monsieur Lange*

(1935年、96分、白黒)

詩人のジャック・プレヴェールが脚本に参加したこの作品は、労働者の解放をめざす左翼的内容だったが、結果として「演技的、技術的奇跡の密度が最も高く、純粋の真実と美が最も多く詰め込まれた映画」(トリュフォー)となった。



「マッチ売りの少女」*La Petite Marchande d'Allumettes*

(1927年、29分、白黒、サウンド版)

アンデルセンの童話を、幻想的な手法で描いた作品。雪の降る新年の夜、マッチを売る少女はいじめられ、マッチを擦っているうちに眠り込む。夢の中で馬に乗って空を駆けるシーンがすばらしい。ニュープリントによる上映。



「坊やに下剤を」*On Purge B b *

(1931年、62分、白黒)

ルノワールのトーキー第1作で、やんちゃな子供を中心に繰り広げられる家庭ドラマだが、水先トイレの音など、音の実験が随所に見られる。ミシェル・シモンとフェルナンデルの二人の若優の演技も見ものである。



「ショータル商会」*Chotard et Cie*

(1932年、83分、白黒)

食料品店を経営するショータル父子をめぐる愛すべき喜劇であり、その父親をマルセル・パニョルの映画の名優フェルナン・シャルパンが演じている。店の中を縦横無尽にめぐるカメラワークも見事。フランスでもほとんど上映されない幻の作品。



「人生はわれらのもの」*La vie est nous*

(1936年、66分、白黒)

作家ルイ・アラゴンの依頼により、フランス共産党の製作で撮った3部構成のプロパガンダ映画。それぞれ工場労働者、農民、青年技術師の生活に困っているのを同志が助けるという物語。2部は主にジャック・ベッケルが監督。



「ピクニック」Partie de Campagne

(1936-46年、40分、白黒)

モーパッサンの小説を原作に、パリ郊外の川辺で一家が過ごす午後を描いた、詩情あふれる作品。特に主人公の娘を演じるシルヴィア・バタイユが印象に残る。ジョゼフ・コスマ作曲のメロディも美しい。



「大いなる幻影」La Grande Illusion

(1937年、115分、白黒)

世界的に最も人気の高いルノワール作品。ジャン・ギャバン、シュトロハイムに加えて、ピエール・フレネー、マルセル・ダリオ、ガストン・モドラの名優たちがつづる兵隊たちの美しき物語。戦後日本で封切られ、一世を風靡。



「獣人」La Bête Humaine

(1938年、103分、白黒)

『女優ナナ』に続いて、ゾラの小説を原作とした作品で、宿命の病を背負った機関士(ジャン・ギャバン)の悲劇を描く。ギャバンとその愛人を演じるシモヌ・シモンの狂気の愛は、とどまるところを知らない。



「スワンプ・ウォーター」Swamp Water

(1941年、86分、白黒)

ルノワールがアメリカに渡って、20世紀フォックスの求めに応じて作った第1作。ジョージア州の奥深い沼地を舞台に、ダナ・アンドリュース、アン・バクスター、ウォルター・ヒューストン、ウォルター・ブレナンらが演じる人間模様。

ルノワール、 Le Grand Théâtre de Jean Renoir 映画のすべて。

ジャン・ルノワール——印象派の画家である父親から受け継いだ才能を、
映画に開花させた男——そのすべて!

フランス、アメリカなどからも最高のプリントを取り寄せ、
全作品日本語字幕付き(サイレント作品の一部ナレーション)で上映

「ジャン・ルノワール、最も偉大な監督」——オーソン・ウェルズ

「ルノワールには映画のすべてが含まれている」——エリック・ロメール

「ルノワールの映画は、まるで人生のようにリアルで、最高の意味で映画らしい」

——ベルナルド・ベルトルッチ



「どん底」Les Bas-Fonds

(1936年、90分、白黒)

ゴッリキーの戯曲をもとに、亡命ロシア人たちの依頼により製作。ルノワールはジャン・ギャバンとルイ・ジューヴェという対照的な二大俳優を見事に使いこなした。戦前の日本で知られていた唯一のルノワール作品。



「ラ・マルセイーズ」

La Marseillaise

(1937年、135分、白黒)

マルセイユからパリに向かう義勇軍を中心に、貴族から下っぱの兵士にいたるまで、あらゆる登場人物に親しみを込めた、ルノワール流フランス革命讃歌。製作は、一般大衆に前売り券を売って資金を集めるという型破りのものだった。



「ゲームの規則」La Règle du Jeu

(1939年、112分、白黒)

錯綜した恋愛関係を軸に、ルノワール流演出の真骨頂にして映画百年の金字塔として知られる傑作。マルセル・ダリオ、ノラ・グレゴール、ミラ・ハレリらの絶妙な演技に加えて、ルノワール本人が演じるオクターヴ役も忘れがたい。



「この土地は私のもの」

This Land is Mine

(1943年、108分、白黒)

アメリカ時代のルノワールが、ナチ占領下フランスのレジスタンス運動を、名優チャールズ・ロートンを主人公にハリウッドで撮った作品。戦後フランスで公開されて酷評されたが、興行きの深いシャープな映像は、凡俗の反ナチ映画と大きく異なる。



「フランスへの挨拶」

Salute to France
(1944年、34分、白黒)
アメリカ人に、同盟国フランスについて教育することを目的として、米陸軍情報局が製作した作品。ヨーロッパに向かう輸送船の中でさまざまな国の兵士たちが「自国について話す」という内容。ほとんど上映されない女の作品の一つ。



「南部の人」The Southerner

(1945年、92分、白黒)
南部の過酷な自然の中で、綿花を育てて生きていく一家（ザカリー・スコットとベティ・フィールドが夫婦を演じる）を、ドキュメンタリーのような生々しさで描いた、ルノワールのアメリカ時代の傑作。ヴェニス映画祭で最優秀作品賞を受賞。



「小間使の日記」

The Diary of a Chambermaid
(1946年、82分、白黒)
ミルボーの同名小説を、ポーレット・ゴダードを主人公に、ハリウッドのスタジオで撮った作品。批評家バザンによれば、この作品をきっかけに、ルノワールはかつてのリアリズム志向から、純粋状態の演劇性へ向かうという。



「浜辺の女」

The Woman on the Beach
(1946年、71分、白黒)
ロバート・ライオン、ジョーン・ベネット、チャールズ・ビックフォードの3人が織りなす悪夢のような三角関係。ルノワールが当時アメリカで流行していた異常心理や夢を描いた作品だが、これがハリウッド最後の映画となった。



「河」The River

(1950年、99分、カラー)
ハリウッド脱出の第一作は、英国人作家ルーマー・ゴッデンの同名小説をもとに、インドでオール・ロケをしたテクニカラー作品となった。英国人一家の生活を軸に、大自然との調和を描く、深い精神性に満ちた映画である。



「黄金の馬車」Le Carrosse d'Or

(1952年、100分、カラー)
アンナ・マニャーニを主人公に、イタリアで撮った作品。ヨーロッパからベルギーに流れてきた芝居一座をめぐる、奇想天外かつ自由奔放な傑作恋愛譚。「どこまでか芝居でどこまでか人生？」とマニャーニは問いかける。



「フレンチ・カンカン」French Cancan

(1954年、97分、カラー)
ルノワールが15年ぶりにフランスで撮った作品。かつて組んだジャン・ギャバンを主人公に迎え、人気絶頂のフランソワーズ・アルヌールも加わって、ムラン・ルージュの誕生物語が華やかに展開する。ラストのカンカン踊りは映画史に燦然と輝く。



「恋多き女」Eléna et les Hommes

(1956年、96分、カラー)
19世紀末のパリを舞台に、イングリッド・バーグマン演じる公爵未亡人エレナをめぐる男たち（ジャン・マレー、メル・ファーラー、ピエール・ベルタン）の恋の贈当てゲーム。ラストでジブシーの歌を歌うのはジュリエット・グレコ。



「コルドリエ博士の遺言」

Le Testament du Docteur Cordelier
(1959年、100分、白黒)
スティーブンスンの小説『ジゼル博士とハイド氏』を原作とし、ジャン＝ルイ・パローを主人公に、何台ものカメラを使って、テレビ用に作られた作品。喜劇と悲劇、スタジオで撮った室内と街頭で撮った野外のシーンの対比など、奇妙な印象を残す。



「草の上の昼食」

Le Déjeuner sur l'Herbe
(1959年、92分、カラー)
人工受精の実験に成功した生物学者（ポール・ムーリッス）が、水浴びする少女（カトリーヌ・ルージュ）に恋し、自然の愛に目覚める。ルノワールが父親ゆかりの地、南仏のラ・コレットに戻り、久しぶりにロケで撮った作品。



「捕えられた伍長」

La Caporal Epingle
(1962年、105分、白黒)
『大いなる幻影』と同じく、抽身の脱走をテーマに、ジャン＝ピエール・カッセル、クロード・ブラッセル、ジャック・ジュアノーらの若手俳優を起用した作品。明快で自由奔放なタッチは、むしろ当時のスヴェール・ヴァークに近い。



「ジャン・ルノワールの小劇場」

Le Petit Théâtre de Jean Renoir
(1969年、110分、カラー)
この映画は題名が示すとおり、ルノワールが登場し、4つの芝居を劇場の傍らで紹介しながら、見せてゆく。これは監督が短話を通じて今までの自分の映画を締めくくる遺言状である。フランソワーズ・アルヌール、ジャンヌ・モローが出演。

【関連作品】

「カトリーヌ」Catherine

(アルベル・デュドネ監督、1924年、80分、白黒)
ルノワールが資金を出し、妻カトリーヌが主演した。デュドネが途中で降板したため、事実上のデビュー作と言われている。

「可愛いリリー」La P'tite Lili

(アルベルト・カヴァルカンティ監督、1927年、10分、白黒)
妻カトリーヌとルノワールが帰郷とヒモ役で出演。彼らの息子アランも端役で出ている。モーパッサンの短編が原作。

「ジャン・ルノワールの家族アルバム」L'Album

de la Famille de Jean Renoir
(ロラン・グリティ監督、1956年、26分、白黒)
『恋多き女』公開の際に併映された短編。ルノワールはインタビューに答えて、父について、少年時代について語る。

「現代の映画作家

ジャン・ルノワール 第1部」
Jean Renoir, le Patron I
(ジャック・リヴェット監督、1966年、94分、白黒)
スヴェール・ヴァークの監督たちに「親父」と慕われたルノワールが、リヴェットの質問に答えて語る映画術。

「ジャン・ルノワールの演技指導」

La Direction d'Acteurs par Jean Renoir
(ジゼル・ブロンベルジュ監督、1968年、22分、カラー)
ルノワール特有の演技指導を、ルーマー・ゴッデンのテキストを使って、具体的にを見せてくれる貴重な一編。

「『ピクニック』の撮影風景」

Un Tournage à la Campagne
(アラン・フレッシュ編集、1994年、85分、白黒)
シネマテーク・フランセーズに残されていた、『ピクニック』の使われなかったラッシュによる、もうひとつの『ピクニック』。

「『ピクニック』のリハーサル」

Essai d'Acteurs pour "Une Partie de Campagne"
(クローディヌ・コーフマン編集、1994年、15分、白黒)
同じく残されたラッシュのうち、俳優のリハーサルを集めた小品。ルノワール本人もカメラに向かって帽子をとって見せる。

「ジャン・ルノワールの生涯」

Jean Renoir
(デイヴィッド・トンプソン監督、1994年、120分、カラー)
英国BBCがルノワール生涯百年を記念してテレビ用に製作したドキュメンタリー。ルノワールを知る人々が語るルノワール像。

●外国より借用する作品も含まれるため、記載された作品が上映できない可能性もありますのであらかじめご了承ください。
●記載した上映数は、当日のものと異なる場合があります。



ルノワールは『大なる幻影』(37)を見てさえも、『どん底』(36)を見てさえも、私はパリを吸い込んでしまう。クレールはパリにフランスの花を咲かせ、ルノワールはパリの心をしみこませてくれた。

ひところ彼はアメリカへ行った。幸いにも私は、アメリカでそのルノワールの『南部の人』(45)を見た。スタインバックの『怒りの葡萄』をフォードは冬の雪を思わせる冷たさと悲しさで、つまり漢字で描いたが、同じ頃のそのアメリカの貧農を、ルノワールはいわばひらがなで画面に移した。貧しい家の一間の中に若い夫婦とその夫の母が同居して、夜毎に二間に分けた毛布の穴から、老母は息子夫婦のセックスを覗く。暗い悲しい貧しさの中に、ルノワールは悲しい笑いをつけ加えた。

ルノワール映画は、空の虹。春の海。秋の通り雨。

淀川長治 *Nagaharu Yodogawa*



ルノワール映画を古くから愛していたロサンゼルスじゅうの花屋が、ルノワールに美しい映画を作ってくださいと、その製作費を差し出した。やさしいその花屋の心をくみとって、ルノワールは名作『河』(50)を完成した。誰が見てもわかる心優しい少女三名の早春物語。カラーでインドの祭りが展開し、少女の一人、インド娘がカタカリ・リズムのインド舞踊を踊る。夜の町には花合戦、色合戦。花を、色のこなを、ふりかけあう祭り。その音楽、その色彩に私はあきれ、見とれきった。このルノワールが久しぶりにフランスに戻って作ったのがあの『フレンチ・カンカン』(54)。パリのムーラン・ルージュ、このパリのムーラン・ルージュ名物のカンカン・ダンスを発明した男の物語。この唄、この衣裳、この日本なら明治時代の時代色。まさに名画。その美しさに目まいがした。その衣裳美術に目が画面にいついた。

しかし、この偉大なるルノワールが気軽に遊んだのが『ゲームの規則』(39)、『草の上の昼食』(59)。ルノワール映画は空の虹。春の海。秋の通り雨。エッフェル塔にかかった三日月。とにかく偉大なる印象派オーギュスト・ルノワールを父に持つジャン・ルノワール。幼くして美術の豪華なる洗礼を受けたのであろう。あのお笑いスケッチのごとき『素晴しき放浪者』(32)の自由。『ピクニック』(36-46)の小川、柳の枝が水面にまで下がった夏の日のひとときの恋のアバンチュール。ルノワールの映画芸術を、私は思い出すたびに、ああ、見ておいたことを人生の幸せと思っている。

Le Grand Théâtre de Jean Renoir

1回目 平日15:00～ 土曜13:00～

11月5日(火) ジャン・ルノワールの小劇場
6日(水) 女優ナナ
7日(木) 水の娘
8日(金) 荒地
9日(土) 騎馬試合
12日(火) 可愛いリリー、カトリーヌ
13日(水) 騎馬試合
14日(木) フランスへの挨拶、ピクニック
15日(金) ゲームの規則
16日(土) ジャン・ルノワールの家族アルバム、恋多き女

2回目 平日18:30～ 土曜16:00～

フレンチ・カンカン
のらくら兵
チャールストン、マッチ売りの少女、ジャン・ルノワールの演技指導
可愛いリリー、カトリーヌ
フレンチ・カンカン
荒地
可愛いリリー、カトリーヌ
獣人
黄金の馬車
ジャン・ルノワールの小劇場

1回目 平日15:00～ 土曜13:00～

19日(火) ランジュ氏の犯罪
20日(水) フランスへの挨拶、ピクニック
21日(木) 十字路の夜
22日(金) ボヴァリー夫人
23日(土) 「ピクニック」のリハーサル、
「ピクニック」の撮影風景
26日(火) フレンチ・カンカン
27日(水) 黄金の馬車
28日(木) 獣人
29日(金) ゲームの規則
30日(土) 大いなる幻影

2回目 平日18:30～ 土曜16:00～

ボヴァリー夫人
「ピクニック」のリハーサル、
「ピクニック」の撮影風景
ランジュ氏の犯罪
フランスへの挨拶、ピクニック
十字路の夜
ジャン・ルノワールの家族アルバム、恋多き女
獣人
ゲームの規則
黄金の馬車
ラ・マルセイエーズ

1回目 平日15:00～ 土曜13:00～

12月10日(火) スワンプ・ウォーター
11日(水) 草の上の昼食
12日(木) 大いなる幻影
13日(金) スワンプ・ウォーター
14日(土) 草の上の昼食

2回目 平日18:30～ 土曜16:00～

南部の人
牝犬
ラ・マルセイエーズ
南部の人
大いなる幻影

1回目 平日15:00～ 土曜13:00～

17日(火) ラ・マルセイエーズ
18日(水) 南部の人
19日(木) 小間使の日記
20日(金) この土地は私のもの
21日(土) トニ
24日(火) 浜辺の女
25日(水) 小間使の日記
26日(木) この土地は私のもの

2回目 平日18:30～ 土曜16:00～

スワンプ・ウォーター
草の上の昼食
トニ
浜辺の女
小間使の日記
この土地は私のもの
トニ
浜辺の女

1回目 平日15:00～ 土曜13:00～

1月7日(火) 素晴らしき放浪者
8日(水) どん底
9日(木) 捕えられた伍長
10日(金) 牝犬
11日(土) 人生はわれらのもの
14日(火) 河
15日(水)* 素晴らしき放浪者
16日(木) ジャン・ルノワールの生涯
17日(金) どん底
18日(土) 坊やに下剤を

2回目 平日18:30～ 土曜16:00～

人生はわれらのもの
河
ジャン・ルノワールの生涯
素晴らしき放浪者
どん底
ジャン・ルノワールの生涯
人生はわれらのもの
河
捕えられた伍長
ショタール商会

1回目 平日15:00～ 土曜13:00～

21日(火) 現代の映画作家
ジャン・ルノワール 第1部
22日(水) ショタール商会
23日(木) コルドリエ博士の遺言
24日(金) 坊やに下剤を
25日(土) 現代の映画作家
ジャン・ルノワール 第1部
28日(火) 水の娘
29日(水) 女優ナナ
30日(木) チャールストン、マッチ売りの少女、
ジャン・ルノワールの演技指導
31日(金) のらくら兵
2月1日(土) 牝犬

2回目 平日18:30～ 土曜16:00～

コルドリエ博士の遺言
坊やに下剤を
現代の映画作家
ジャン・ルノワール 第1部
ショタール商会
コルドリエ博士の遺言
チャールストン、マッチ売りの少女、
ジャン・ルノワールの演技指導
のらくら兵
水の娘
女優ナナ
捕えられた伍長

*1月15日(水)は祝日のため、1回目13:00～ 2回目16:00～の上映となります。

本企画は、シネマテーク・フランセーズを始めとする各国フィルム・アーカイヴ及び各映画会社の協力を得ています。 

関連企画

写真で見る「ジャン・ルノワール、映画のすべて。」UCLAジャン・ルノワール・コレクションより

1996年12月10日(火)～1997年2月1日(土) フィルムセンター7階展示室にて/入場無料

国際映画シンポジウム(東京・1996)「ジャン・ルノワール 芸術の魅力と秘密」

1996年12月7日(土)10:30～17:30 フィルムセンター 大ホール/入場無料

パネリスト: 蓮實重彦(東京大学教授)、アラン・ルノワール(ジャン・ルノワールの子息)、ジャン・ドゥーシェ(映画評論家)、ギ・カヴァニャック(ジャン・ルノワールの元助手)、ジャネット・バークストロム(UCLA準教授)など予定。